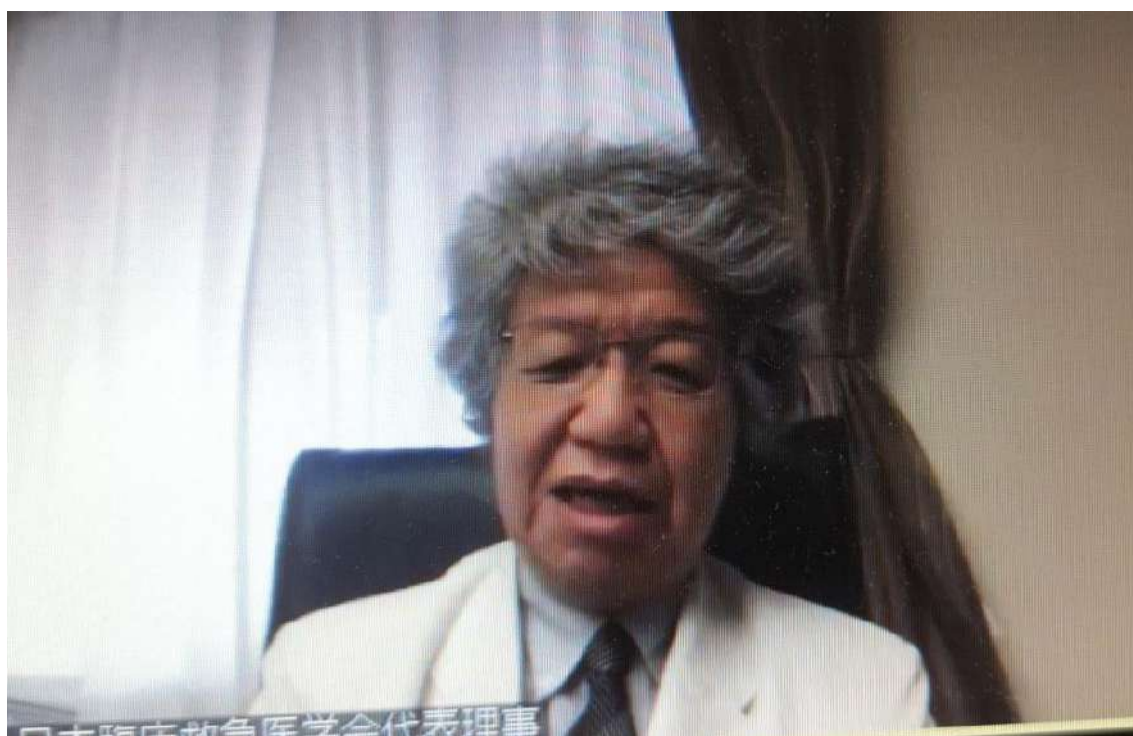


「感染防護具の不足深刻 救急医学会代表理事ら訴え」

日本救急医学会と日本臨床救急医学会の代表理事が 24 日記者会見し、新型コロナウイルス感染の拡大で救急医療の崩壊が心配される事態になっている現状を詳しく紹介した。

インターネットを介した日本記者クラブ主催の記者会見に応じたのは、嶋津岳士日本救急医学会代表理事と坂本哲也日本臨床救急医学会代表理事。まず、坂本氏が新型コロナウイルスによって東京消防庁の救急搬送に大きな影響が出ていることを明らかにした。東京消防庁は救急車で搬送した患者の受け入れを 5 カ所以上の病院から断られた件数を搬送困難例として公表している。坂本氏によると、こうした搬送困難なケースは通常、平均 1 日 20 件だが、新型コロナウイルスの影響で 4 月には 3~4 倍に増えた。



インターネットを介して記者会見する坂本哲也日本臨床救急医学会代表理事

救急車で運ばれた患者の受け入れを拒否するケースが増えているのは、病院にとって新型コロナウイルスに感染の可能性がある患者を受け入れることが大きな負担になるためだ。PCR 検査で陰性と出た患者でも実際は陽性である可能性がある。一般病棟に入れて院内感染が起きてしまう恐れがあるため、感染している可能性を考えると個室に受け入れる必要がある。個室の用意がない病院は、受け入れられない。実際に医療従事者が院内感染する例は急速に増えている。感染した医療従事者だけでなく濃厚接触者とみなされた医療従事

者の多くが自宅待機を強いられる結果となる。こうした病院の厳しい状況を坂本氏は詳しく紹介した。

嶋津岳士日本救急医学会代表理事も、いくつもの病院から断られた患者は救命救急センターがある病院や医療センターが受け入れざるを得ず、救命医療の崩壊が懸念される状況が生じている、という強い危機意識を明らかにした。心筋梗塞など緊急性のある患者は今のところ多くの施設がカバーし合って何とか対応しているが、今後はこうした患者への影響も心配されるという。救急医療体制を拡張することも考える必要がある、と嶋津氏は指摘した。



インターネットを介して記者会見する嶋津岳士日本救急医学会代表理事

嶋津氏は、陽性、陰性、無症状という三つのケースをふるい分けることが大事だとして、PCR検査を増やす必要も強調している。感染防護具、特にN95マスクの不足が深刻になっており、実際に1週間に1度しか交換できない病院の例を紹介して、行政の早急な対応を求めた。さらに院内感染したのではないかと不安から医療に専念できない医療従事者がいることを紹介し、メンタルサポートの必要も指摘した。

坂本、嶋津の両氏ともに強調したのが、患者を増やさない対策の必要。医療現場の負担を増やさないために最も大事なことだとして、感染の機会を減らす行動を国民に強く求めた。

日本救急医学会は、会員に対する新型コロナウイルスに関するアンケートを実施し、そ

の結果を4月15日に学会ホームページに公表している。それによると、「困っていること・課題」として挙げられた中で最も多かったのは、救急車たらい回し、病院の救急不応需・転院受け入れ拒否などを減らす地域の医療体制整備。次いで「个人防护具の不足、アルコールの不足」、「医療者の疲労・不安、労働環境、メンタルサポート、離職」、「PCRについて（検査件数、迅速検査、検査キット）」、「病院への金銭的補償・診療報酬、個人への補償や労災の配慮」などが挙げられている。

会員から寄せられた意見の中には、嶋津氏が紹介したN95マスクの不足に関する不満のほかに、「濃厚接触となったスタッフに対する滞在施設を確保してほしい」、「防護具が十分に供給されないと、いずれ立ち去る医者などが続出してくると思う」、「大量の離職者が出て来ることを危惧している」など切実な声が多い。さらに「地域における病院群を指定して、患者の状態によってそれぞれの病院の役割を設定するようにしてほしい」、「感染者を受け入れる施設の整備、層別化、臨時病院の設置を早めに行ってほしい」など医療体制の整備を求める具体的な意見も数多く寄せられている。

日文 小岩井忠道（JST 客観日本編集部）

関連サイト

日本記者クラブ会見レポート「『新型コロナウイルス』嶋津岳士・日本救急医学会代表理事・坂本哲也・日本臨床救急医学会代表理事」

<https://www.jnpc.or.jp/archive/conferences/35647/report>

日本救急医学会「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）への対応について アンケート結果」

https://www.jaam.jp/info/2020/info-20200415_3.html